

2. 社会化と教育の關係

山 村 賢 明

埼玉大学

人間の社会化が、教育と呼ばれる現象と深く関わっており、社会化の問題が教育社会学の一つの主要な研究領域であることは否定するものはいないであろう。しかし社会化研究が一般化し、まことに人にならざるほど、両者の關係をどのようなものと考えようか、また社会化の研究が教育の實踐と研究によってどのような意味をもつのかを明らかにする必要が生じてくる。教育と社会化を概念的にどうとらえるかは、究極的には操作的定義の問題になるのかもしれない。しかし概念的に両者を同一のものとするにしても、逆に両者を識別するにしても、その根拠が明示され、それが教育にとってどのような意義や有効性が検討されなければならぬ。私自身は、社会化と教育は概念として区別され、両者は緊張關係においてとらえなければならぬとする立場にたつものであるが、以下その理論的・実践的根拠を示したことを思う。

1. 人間觀の問題

(1) E・デュルケームの社会学が示したように、たしかに個人は社会=道徳をうけ入れることによつて人間的たりうるものであり、その限りにあって、社会が個人に課する拘束は善であるのかもしれない。しかし人間は完全に社会に同化されるものでもないし、又個人において社会が抑圧の機能を停止することにはなみない。

(2) 同知のように S・フロイトは、リビドーを中心にしてイド・自然・超自然という人格構造を構想したのであるが、そこにおいてイドは本能的に非歴史的・反社会的な性格をもつものとされ、それを統御するものとしての文明の発達について、晩年のフロイトにはペシミスティックな観点が感じられる。逆にマルクーゼにおいては、抑圧の機構としての社会のラディカルな変革によるリビドー

(エロス)の解放がもくろまれている。

(3) これまた同知のように G・H・ミードにあって self の発達とは、社会的統制の表象としての me とそれに主体的に反応しかえす I とのダイナミックな關係としてとらえられていた。とりわけ I の側面は、^{社会的}社会の革命的要素となるものであり、完全には社会に同化されつくされないものというべきではなからうか。これを社会に還元しつくされない自然の問題とするなら、それは実存の問題にもつながるものである。例えば「大人になることは恥かしいことだ。それは誘惑と屈辱による自然の屈伏であり、社会によつておかされることだ」とみえようか。J・P カルトルなどのとらえ方のなかには、社会的な me にたいする主体的な I の優位への主張がみられる。

(4) 人間をそのような次元でも含めてトータルに把握することは、経験科学として社会学・教育社会学のよくするところであるが、又はその任務であるとは考えない。むしろそれは社会学の限界なのかもしれない。ただ社会との関連で人間をとらえ、又社会的關係の細目のなかに位置づけ、人間を問題にするためには、ともすると「over socialized」な人間觀におちいる社会学によつて、人間の社会に還元されない側面にも一定の位置を与えておく必要はあるのではないかということである。

2. 社会化の立場

(1) パーソナリティと文化と社会体系という三つの枠組によつて人間の社会や行いが分析されるということ、社会化によつて個人と社会が接合されるということ、社会化が社会体系によつてもパーソナリティ体系によつても機能的要件であること、等々の社会学的命題の妥当性を認めた。いろいろ

でもなくそれは、社会はいかにして可能となるか、社会はいかにして秩序だつて機能しうるか、という社会を中心にあつた立場である。すなわち社会体系から個人を問題にしてゐる。その限りにあつて社会化は体系維持的である。

(2) しかしそれは別に、個人からの発想、体系変革的立場というものが当然考えられる。この問題は、ラドクリフ・ブ라운とマリノフスキーの学問的対立にさかのぼるものであり、またマルクス主義社会学の問題とも関連してゐるのである。そして社会学の一般理論としてそれらがどのように統合できるかは、大きな問題であるが、しかし当面の問題に限つていへば、社会化の概念は、この後者の立場や発想になじみにくいものであることは確かである。むしろそれは、人間の意識的・行為的集合的運動の領域における当然 (sollen) の問題に、より深く結びつく性格のものである。

(3) 社会がどのような個人を必要とするかという問題は社会化であるが、個人がどのような個人であることと雖、そのために社会がどうあることを要求するかということ、社会化というよりは、むしろ教育実践（とりわけ学校における）のなかにおいて重要な問題とされてゐる。勿論教育は、社会の必要に応じて社会化としても行われてゐるが、しかし他方一人一人の子どもの可能性や個性のばし、それぞれの個人の幸福を顧みて行われ、あるべき社会をめざして理念的に行われてゐる。教育のその面を「教育」というとすれば、それは時として社会化を批判したり、社会化とは逆の価値を志向することもある。つまり「教育」と社会化から区別するものは、意圖的・点意圖的、フォーマル・インフォーマルの基準ではなくその志向の違いである。

(4) 社会化が社会の要請であるとすれば、「教育」はつまみわければ教育という個人の問題になり、志向や思想の自由、さらには教育の自由の問題とかがわつてくる。「教育」はより一層閉鎖にすれば、むしろ I の側面により深く結びつくといへる。又 personalization が問題になる

も、むしろここにおいてではあるまいか。いずれにしても、自己 I と me のダイナミックな関係が発達するように、学校教育の中において、社会化と「教育」は緊張関係をほらんで行われてゐるといへよう。「教育」の機能を果たすことが制度的に期待されてゐるほとんど唯一の機関が、学校教育における学校であるとすれば、社会化機能の肥大化、初年化する今日の学校教育について、両者を識別することは重要な意味をもつてゐる。

3. 社会化研究の意義

以上要するに、個人が社会に還元してゐるものでない、社会化が社会の体系維持の機能にまつて行われる適応的なものであり、個人の発達要求に基づいて主体的創造的に行われる「教育」と区別されるべきものであるとするなら、社会化と社会化研究は、教育研究のすべてではないことは明らかである。それでは社会化研究はどのような意義をもつのであろうか。

(1) まず社会化は当該社会の伝統的文化との関係においてどのような人間が、どのような世として形成されるかを明らかにすることが出来る。基礎的・パーソナリティとしての国民性とか、一定の社会の文化的特徴を支える人間的要素の側面を解明しうるであろう。

(2) 社会化研究は、個々の下位集団における社会化の問題だけでなく、諸社会の構造や類型との関連において、人間形成のメカニズムや内面性（例へば排外や非人権性、攻撃性など）を明らかにすることが出来る。

(3) 総じて社会化は、社会の中での人間形成の姿態を Sein のレベルで追求し、その課題を提示するのであるが、そのことを通して学校教育における人間形成のあり方、その方向に批判的示唆を投げかけることが出来るであろう。社会化そのものは体系維持的な日常的過程であつて、社会化研究は自覚的・理念的な営みとしての「教育」や体系変革にとって重要なかわりをもつといへる。